

特 集

祝 徳丸尚歯会100周年記念式典

しょう し かい
徳丸尚歯会から
見えるもの

70 歳以上の人を敬い慰安することを目的に
大正2年、徳丸地区に設立された「徳丸尚歯会」。
毎年1回、地域の特産「ソラマメ」が最盛期を迎える5月に
高齢者を招待して労をねぎらっている。
今年で100周年。「徳丸尚歯会」が築いてきたものとは。

「文化継承」

地域の特産「ソラマメ」。特に徳丸の人はこの野菜に特別な思いを抱いています。ソラマメが最盛期を迎える5月、徳丸では地元の高齢者を招待し、ソラマメの煮物などのごちそうを振る舞い、演芸を披露する宴の席を用意します。今年もごちそうが並び、高齢者は「おいしいのう」と目を細めました。



徳丸の味「ソラマメ煮」を味わう招待客

100年前に始まった尚歯会

今年で100回目を迎えた「徳丸尚歯会」は、地元の高齢者を招き、労をねぎらう行事。高忍日売神社での神事に続き、老人憩いの家での宴会で高齢者をもてなします。

昔から、日本には尚歯会という集まりがありました。「尚」には尊ぶという意味があり、「歯」は年齢の表現。尚歯会とは通常、長寿を祝う会の意味を持っています。ただ尚歯会は、単に老人を慰労する場ではなく、古くは長寿者を中心に詩歌や管弦を楽しむ文化的な集いであり、幕末の思想弾圧の歴史に登場する尚歯会は、蘭学を通して医学や政治などを学ぼうという活力に満ちた場でした。明治時代になると、庶民の敬老行事、地域高齢者の集いとして存続してきました。

今も息づく「敬老尚歯」の精神

第100回尚歯会は5月13日、神社と徳丸憩いの家で開かれました。今年の招待客は193人。うち72人が出席しました。初めに神事が行われ、主催者や招待客の代表が玉串を捧げ、高齢者のこれまでの活躍をたたえ、長寿を願いました。

神事後、後藤正宜宮司は「地域の発展は先人が積み重ねてきた努力です。私たち人間の、何気ない毎日の積み重ねが地域をつくります。徳丸という素晴らしい地域をつくっているのもここにいらっしゃる皆さんです。互いに仲良く、楽しく、良い故郷になるよう、これからも力を貸してください」と語りかけました。

住民らはこの日のために100周年を記念した石碑を建立。記念碑は、先人の美風を地域の宝として後世に建て、神事後、除幕式を行いました。記念碑建立は、「100回の際には、何か記念にしよう」と3年前から考えられていたこと。大字徳丸と徳丸老人クラブ寿会では毎年それぞれ5万円の積立をしていました。

除幕式には、地域の人たち約100人が集まり、入魂の読経後、除幕。中野良雄区長が「徳丸の先人が残した長老を大切に敬う習慣は今後も大切にしていきたい」とあいさつし、餅まき

をして祝いました。

そのあと、会場を憩いの家へ移動すると、婦人部や有志の皆さん手作りの「ソラマメ煮」や「小豆ごはん」など、招待客を心のこもった料理がお出迎え。友人と語らいながら口にする「徳丸の味」に、招待客の表情には自然と笑顔がこぼれました。

演芸は、徳丸伊予万歳保存会の演目からスタート。あでやかな衣装に身を包んだ踊り手の華麗な舞に、声援が送られました。渡部三味線教室は「いやさか音頭」など3曲を披露。招待客は、目をつむって聞いたり、口ずさんだり、手拍子をしたりして、懐かしのメロディーを心ゆくまで楽しみました。野良猫コスチュームで登場した健康体操クラブのメンバーたちは、軽快なリズムに乗って「野良猫三度笠」を披露。かわいらしいパフォーマンスで招待客を楽しませました。このほかに地元の方々によって次々に披露される演芸。どの演目にも、会場からは大きな拍手が送られ、憩いの場は温かい空気に包まれました。



区長 中野良雄さん (60)
Nakano Yoshio

区長としてこの行事を行えることに無上の喜びを感じます。この徳丸の団結力・結束力の強さは地域の誇りです。



第1回徳丸尚歯会 (大正2年5月16日)

大正2年5月16日、徳丸では70歳以上のお年寄りを招き、神事と料理を振る舞ったり、余興を披露したりする催しを行いました。これが徳丸尚歯会の始まりです。設立趣意書によれば「夫れ老人は現社会を産出したる過去の功勞者にして実にはわが地方の至宝なり」とあります。第1回の招待客は23人。神社の事業として行われ、郡長、村長や学校長が参列していたと言います。

設立当時、助役だった遠藤良貞氏の孫・遠藤雅之さんは「尚歯会」をやるうやという人たちの中に祖父がいたと聞いています。設立時は宮総代が費用を出し、招待する側もされる側も羽織はかま。それぐらい昔から価値をおくものでした」と話します。

その後、毎年必ず行われてきた尚歯会。地元農家が提供する食材を婦人会が中心となって調理し、余興と共に高



遠藤雅之さん (84)
Endo Masayuki

戦時中もやめなかった尚歯会。すごいことです。先人の思いを大事に、これからもぜひ続けていきたいです。

時代と共に変化

しかし、戦後の物価の高騰、老人の増加などから従来の会員の会費や寄付では継続不可能に。そこで、昭和27年第40回尚歯会をもって大字徳丸に移管され、翌年からは徳丸地区全員でこの精神を継承実践してきました。

時代の変遷に合わせ少しずつ変化を見せる尚歯会。平成8年、対象者は75歳以上に引き上げられました。平成14年、仕出し折を取り始めました。長命化が進み、年々招待客は増加。平成に入るところには、招待客が会場に入りきらないほどになっていたからです。これだけの人数分の料理を準備するため、婦人会は前日から夜通し調理していたといいます。仕出し折を取るようになった今でも、地元のソラマメを使った料理と、小豆、米を使った小豆ごはんを手作りすることは欠かしません。

- 1) 高忍日売神社に建てられた記念碑の除幕式
- 2) 100回記念として行われた餅まき
- 3) 体操クラブの皆さんによる踊り「野良猫三度笠」
- 4) かわいらしいコスチュームで
- 5) 徳丸尚歯会を象徴する「ソラマメ煮」
- 6) 華麗な伊予万歳に見入る招待客





もてなされた人
田中 孝さん (76)

Tanaka Takashi

もてなす側からもてなされる側になって、今年が2回目の尚齒会。料理を作ってもらったり、演芸を見せてもらったり…昨年以上に感動しました。100回記念だからというわけではないのですが、「うれしい」と心から思いました。徳丸の先代というのは、水の確保に苦勞し、一致団結して地域を守ってきました。その苦勞があるから今の徳丸がある。そのことを

いつも思っ、敬老尚齒の気持ちを大切にしてきました。もてなされる側になって、若い人にもこの精神が伝わっているのが感じられたことがうれしく思います。

若い人がこうやってしてくれると、年をとってきて、体が思うようにいかないとしても、徳丸の中で何かしていきたい、ごみの一つでも拾いたいと思う。みんなで思いやりのある徳丸にしたいです。

料理をふるまった
八束清子さん (56)

Yatsuzuka Kiyoko

婦人会は組長の奥さんがなるもの。毎年メンバーが変わるので、みんな上手いくかドキドキです。近所の人に聞いたり、お料理をもてなすのが上手なベテランさんに手伝いに来ってもらったりしながら準備しました。恒例メニューの「ソラメ煮」と「小豆ごはん」。食材は全て地元の農家さんがくれるもの。感謝しながら喜んでもらえるように愛情込めて調理しました。

準備するのは200人分。前日1日ばかりで下ごしらえして、当日は朝5時30分に集合しました。昔は折も作っていたとか…。調理しながら100年続けてきたお年寄りのすごさを知りました。お年寄りがいての今なのだと改めて思いました。いずれは自分も招待される側になります。そのとき若い人に必要とされるように、先輩が築いてきたものを学んでおきたいです。



農村地域で苦勞した徳丸。それでも土地を大事に守ってきた先人たち。徳丸尚齒会には、そうした先人たちが積み重ねてきた努力に感謝する心があります。「もてなす人」は、料理をふるまっ、あるいは演芸を披露し、感謝の気持ちを表現します。

今年、料理を準備した八束清子さん。その準備の大変さから100年続けてきた先人たちのすごさを知り、もてなし上手なベテランに頼ったことで、地域の先輩の偉大さを再認識。自分の今後も見つめ直しました。演芸を披露した渡部喜代隆さん。メンバーと招待客とともに踊りを楽しむことで、高齢者への思いを表現。そうすることで、自分が地域の一員であるということを実感しました。

「相乗効果」

もてなす人、もてなされる人。
尚齒会にはたくさんの人の思い、感謝が重なっています。
絶え間なく重ねあげてきた思いの上に、
今の尚齒会があります。



もてなされた
門屋八重子さん (83)

Kadoya Yaeko

いつも演芸を楽しみにしています。毎年最後まで見て帰ります。せつかくこんなにしてもらっているのに、途中で帰るなんてできなくて。帰ってテレビの前に座るより、こうして地域の皆さんと一緒に過ごすほうが楽しい。今年も大変よかったです。少し残念だったことは、途中で帰ってしまう人がいたこと。みんなで一緒に、できるだけ長く楽しみたいです。

立派な演芸を見せてもらって、おいしい料理をごちそうになって、みんなでお話していると、自分もまだまだ元気でやっていかんといかんなど励まされます。これから地域で元気に過ごしたい。今年は100周年記念の素敵な湯呑みまでいただきました。ありがとうございます。大事にします。こんなに温かい尚齒会。いつまでもぜひ続けていきたいです。

踊りを披露した
渡部喜代隆さん (73)

Watanabe Kiyotaka

今年初めて尚齒会で踊りを披露しました。メンバーで踊りが上手な人に教えてもらいながら、この日のために練習しました。衣装もみんなで意見を出し合って決めました。今年は「野良猫三度笠」という踊りに合わせて野良猫の格好をしました。何より皆さんと一緒に楽しみたいと思ったので、「下手でもいい、一生懸命しよところを見てもらお

う」と思いました。参加している人の表情や仕草を見て、心が通った気がしました。する側とされる側の間に溝がないから互いに楽しめるのだと思います。

踊ることで、一緒に踊ったメンバーとの絆が生まれましたし、地域の一員としての連帯感、自覚を持ちました。これからもみんなで楽しみながら、地域を盛り上げていきたいです。



「地域発展」

徳丸尚歯会が築いてきたのは、歴史や伝統だけではなく、**「敬老尚歯」の言葉や行動。**それは大きな相乗効果を生み、地域を発展へと導いています。



「渡部三味線教室」の練習風景。生徒の三味線に芳美さんが歌をのせて。



渡部三味線教室 先生
渡部芳美さん (87)
Watanabe Yoshimi

みんなが教えたら教えた分だけ上手になるのがうれしい。これからもみんなと楽しく続けていきたいです。



渡部三味線教室 生徒
松田眉美さん (68)
Matsuda Mayumi

何にでもチャレンジする先生の性格、熱心な指導から「やれば何でもできる」ことを教えていただき感謝です。

住民みんなで地域をつくる

尚歯会の宴会では「こうやってみんなで集まって。ええもんよね」とみんなが楽しんでいました。「100年も続いとるんよ、素晴らしいもんじゃ」と誇りに思っていました。「ぜひ続けていきたい」と、もてなす側でなく、もてなされる高齢者が言います。

人口減少や高齢化は進んでいます。徳丸尚歯会に参加していると「住民みんなで地域をつくっていく」という気持ち、はつきりが見えるような、理想的な地域づくりが感じられます。そこにあるのは敬老尚歯の精神です。

尚歯会だけではなく、趣味、ボランティア、サロン、伝承活動など、徳丸地区ではさまざまな場面で、敬老尚歯の言葉や行動が見られます。

「出番」があるサロン

老人憩いの家に高齢者サロンが開設したのは昨年4月。13人の協力が世話人として支援しています。開催日は月1回。体操したり、お茶を飲みながら懇談したり。孫のこと、畑のこと、グラウンドゴルフのことなど、話は尽きません。サロンは「参加しやすい」と評判で、高齢者はイキイキと輝いています。

代表の伊藤すみれさんは「どんなこ

習う楽しみ、頼られる喜び

「若い人が高齢者を」はもちろん重要ですが、「高齢者が若い人をも重要です。人から頼りにされたり、役に立ったりすることは、豊かな人生を送る一番のエネルギーになるはずですよ。」

渡部芳美さん87歳。自宅で三味線教室を開き、現在、5人の生徒を指導しています。生徒はご近所の人ばかり。地域の行事などで見る芳美さんの輝く姿に思わず「教えてください」と志願して始めた人。「三味線やってみんな？」と芳美さんに誘われて始めた人。動機はさまざまですが、生徒は皆「先生に習ってよかった」と口を揃えます。

八束テルミさんは「三味線の技術はもちろん、地域のことをよく知り、人生経験の豊富な先生から学ぶことはたくさん」と慕います。松田眉美さんは「上手く弾けなくて辞めようかと思っただけでもありました。でも先生が根気強く教えてくれて。先生の熱心さと、みんなで楽しく頑張ろうという教室の雰囲気が好きです」と微笑みます。渡部美代子さんは「先生やみんなで三味線弾いたり、お話ししたりすると、心がほつとします。ここに来るようになってから、性格が明るくなった気がします」とにっこり。「そんなん言ってくれて」と芳美さんにもにっこり。

嫁の恵美さんも徳丸に嫁いだ時から

とをすれば喜んでもらえるか模索中です。でもこちらが『してあげる』ではなく『してもらう』気持ちです」と話します。会員の皆さんは知識と経験の豊富な地元の大先輩。そんな高齢者に学びたいと言います。

「みんなに出番をもってもらいたいです。自分が年をとったとき、きつとしてもらっただけじゃつまらないと思うんです。いくつになっても、誰かの役に立ちたいと思うはずですから」

サロンではこれまで何度かクッキングをしました。1回目は柏餅と醤油餅作り。子どもも参加して教わりながら作ったといいます。「皆さん、子どもに教える喜びを感じたようでイキイキしていました。それを見てこちらもうれしくて」とにっこり。7月には、会員の皆さんに、ちらしずしを教えてもらう予定です。

徳丸サロンは、与える側と与えられる側で一線を引いていません。だから「参加しやすい」サロンです。高齢者の「出番」があります。だから「高齢者がイキイキ輝く」サロンです。



徳丸サロン代表
伊藤すみれさん (61)
Ito Sumire

知識と経験の豊富な先輩が地域にたくさんいます。出番がないなんてもったいない。いろいろな学びてもらいましょう。

三味線を習っています。「教室での母を見てみると、家族はもう年やけん辞めといったらと心配するけど、本人にとったら『先生、先生』と言われるのが元気の源なんだと思えてなりません」と話します。「何もできんのに、頼ってもらってうれしい。みんなに助けてもらってるよ。ありがとう」と感謝する芳美さん。「まだまだ続けるよ」とまぶしい笑顔を見せます。

徳丸流「敬老尚歯」から地域発展へ

「敬老」とは老人を敬うこと。それだけじゃなく、老人に頼ったり、活躍する場があるというのが徳丸の「敬老尚歯」です。「敬老尚歯」の精神から、高齢者は「地域の一員として居場所」を感じることが出来ます。だから高齢者はいつまでも輝き、地域でできることをしようと思つのです。そんな高齢者を見てさらにまた、若い世代が、みんなで地域を良くしようと思に決めます。

徳丸尚歯会が築いてきたのは、歴史や伝統だけではなく、徳丸に自然と受け継がれている「敬老尚歯」の精神。それは大きな相乗効果を生み、「互いに仲良く、楽しく、よい徳丸になるよう力を出し合おう」という気持ちを高め、地域を発展へと導いています。

「老い」を誇れる地域は、発展の可能性が広がっています。